①恐慌についての二つの考え

ところで、資本主義社会における蓄積と生産物の実現との科学的分析は、この理論のすべての根拠をくつがえして、恐慌に先行する時期にこそ労働者の消費が高まるということ、不十分な消費（恐慌を説明するかのように言われている）は、種々さまざまの経済制度のもとで存在していたが、恐慌は、ただ一つの制度――資本主義制度だけの特殊な標識をなすということをしめした。この理論は、恐慌を他の矛盾によって、すなわち生産（資本主義によって社会化された）の社会的性格と取得の私的な、個人的な様式との矛盾によって説明するのである。これら二つの理論の深刻な差異は、自明であろう。しかし、われわれは、その差異をより詳しく論じなければならない。なぜなら、まさしくロシアにおけるシスモンディの追随者たちが、この差異を**抹殺し**て事態を混乱させようとつとめているからである。われわれがいまかたっている二つの恐慌理論は、恐慌にたいしてまったく異なった説明をあたえている。第一の理論は、恐慌を生産と労働者階級の消費との矛盾によって、説明する。ところが第二の理論は、生産の社会的性格と取得の私的性格との矛盾によって、説明する。したがって、第一の理論は、現象の根源を**生産の**外部に見るが（そこで、たとえばシスモンディは、古典学派の人々が生産だけに注意をむけて消費を無視しているといって、彼らを全般的に非難する）、第二の理論は、まさに生産の諸条件のうちに、その根源を見る。簡単にいえば、第一の理論は、恐慌を不十分な消費（Unterkonsumption）によって説明するのにたいし、第二の理論は、それを（は）生産の無秩序によって説明するのである。このように、二つの理論とも、恐慌を経済体制そのものにおける**矛盾**によって説明しながら、この矛盾をしめすとなると、まったく分かれてしまうのである。そこに疑問がおこる。第二の理論は、生産と消費との矛盾という事実、不十分な消費という事実を、否定するのであろうか？　**もちろん、否定しない**。この理論は、この事実を十分にみとめている。しかしその事実を、資本主義的生産全体の一つの部門だけにかんする事実として、それにふさわしい従属的な地位をあたえるのである。この理論がおしえるところによれば、この事実は、現代の経済制度の、他の、より深刻な、基本的な矛盾によって、すなわち、生産の社会的性格と取得の私的性格との矛盾によってひきおこされる恐慌を、説明することができないのである。だから、みずからは本質的には第一の理論を固執していながら、第二の理論の代表者たちは生産と消費との矛盾をどのように確認するのかなどと言ってごまかしている人々については、なんと言うべきであろうか？　あきらかに、これらの人々は、二つの理論の差異の基礎を**よく考えなかった**のであり、そこで当然、第二の理論を理解しなかったのである。……

シスモンディは言う、――恐慌は可能である。なぜなら工場主は需要を知らないから。恐慌は必然的である。なぜなら資本主義的生産においては、生産と消費との均衡はありえないから（すなわち、生産物が実現されえないから）と。エンゲルスは言う、――恐慌は可能である。なぜなら工場主は需要を知らないからである。しかし、恐慌が必然的であるのは、一般に生産物が実現されえないからでは、けっしてない。そうではない。生産物は実現されうる。恐慌が必然的であるのは、生産の集団的性格が取得の個人的性格と矛盾するようになるからである、と。……

「生産の無政府性」、「生産の計画性の欠除」、――これらの言葉はなにをものがたってい

るだろうか？　それは、生産の社会的性格と取得の個人的性格との矛盾をものがたっている。そこで、いま検討しつつあるこの経済文献を知っているすべての人に質問するが、シスモンディあるいはロードベルトゥスは、この矛盾をみとめていたであろうか？　彼らは、この矛盾から恐慌を結論づけたであろうか？　いや、彼らは結論づけなかったし、また結論づけることもできなかった。**なぜなら、彼らのうちのどちらも、この矛盾をまったく理解していなかったからである**。資本主義の批判を、全般的な福祉とか、「自由に放任された流通」のまちがいとかいう言葉のうえに基礎づけてはならないのであって、生産関係の進化の性格のうえに基礎づけなければならない、という考えは、彼らには絶対に無縁のものであったのである。（第二巻『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』P150~151,154~155、1897 年３月執筆）

②生産と消費の矛盾について

生産の（したがってまた国内市場の）発展が、主として生産手段の増大によるということは、逆説的であるかのように見えるし、疑いもなく矛盾である。これが、本当の「生産のための生産」、すなわち、それに照応する消費の拡大のない生産の拡大である。しかし、これは学説の矛盾ではなくて現実生活の矛盾である。これは、とりもなおさず、資本主義の本性そのものおよびこの社会経済制度のその他の矛盾に照応する矛盾である。ほかならぬ、それに照応する消費の拡大のないこの生産の拡大こそ、資本主義の歴史的使命とその固有の社会的構造とに照応している。すなわち、その使命は、社会の生産力の発展にあるが、その社会的構造は、住民大衆によるこれらの技術的成果の利用を排除しているのである。資本主義に特有な、生産の拡大にたいする無制限の志向と、人民大衆の制限された（彼らのプロレタリア的状態のために制限された）消費とのあいだには、疑いもなく矛盾がある。ほかならぬこの矛盾を、マルクスは、ナロードニキが国内市場の縮小とか、資本主義の非進歩性とか、等々いう彼らの見解を立証するものであるかのように、このんであげるあの諸命題のなかで、確認しているのである。ここに、これらの命題のうち、いくつかのものをとりあげてみよう。「資本主義的生産様式における矛盾。――商品の購買者としての労働者は市場にとって重要である。だが、彼らの商品の――労働力の――販売者としては、資本主義社会は、労働力を最低価格に制限する傾向がある」（『資本論』第二巻 303 ページ）〔第一六章 316 ページ「注」32〕。　「……実現の諸条件は……相異なる生産諸部門間の比率性によって、また社会の消費力によって制限されている。……だが、生産力は、発展すればするほど、消費関係がよって立つ狭い基礎とますます矛盾するようになる」（『資本論』第三巻第一冊、225~226 ページ）〔第一五章第一節、272~273 ページ〕。　「生産者大衆の収奪と窮乏化とにもとづく資本価値の維持および増殖がその内部でのみ運動しうる諸制限は、資本がその目的のために充用しなければならない生産方法、――生産の無制限な増加、自己目的としての生産、労働の社会的生産力の無条件的発展を志向する生産方法――とたえず矛盾する。……だから、資本主義的生産様式は、物質的生産力を発展させこれに照応する世界市場をつくりだすための、一つの歴史的手段だとすれば、それは同時に、こうした歴史的任務とこれに照応する社会的生産関係とのあいだの不断の矛盾である。」（『資本論』第三巻第一部、232 ページ、ロシア訳 194 ページ）〔同第二節、278~279 ページ〕。　「あらゆる現実の恐慌の究極の原因は、依然としてつねに、大衆の窮乏と消費制

限――あたかも社会の絶対的消費能力だけが限界をなすかのように生産力を発展させようとする資本主義的生産の衝動とくらべての――である」（『資本論』第三巻第二冊、21 ページ。ロシア訳 395 ページ）〔第三〇章、528 ページ〕。これらのすべての命題のなかでは、生産を拡大しようとする無制限の志向と、制限された消費とのあいだの前記の矛盾が確認されているのであり、それ以上のなにものでもない。『資本論』のこれらの箇所から、あたかもマルクスが資本主義社会における剰余価値の実現の可能性をみとめなかったかのように、また、彼が恐慌を過少消費によって説明したかのように結論することほど、不条理なことはない。マルクスの行った実現の分析は、「不変資本と不変資本とのあいだの流通が、……終極においては個人的消費によって制限されている」〔『資本論』第三巻３３６ページ〕ことをしめした。しかし、この同じ分析は、この「制限」の真の性格をしめし、国内市場の形成においては消費資料が生産手段にくらべてより小さな役割しか演じないことを、しめした。だから、資本主義の諸矛盾から、その不可能性とかその非進歩性、等々を結論することほど、ばかげたことはないであろう。これは、不愉快ではあるが疑うことのできない現実から、ロマンティックな空想の天界へと逃避することを意味する。生産を無制限に拡大する志向と制限された消費とのあいだの矛盾は、一般に矛盾なしには存在することも発展することもできない資本主義にとって、唯一の矛盾であるわけではない。資本主義の諸矛盾は、資本主義の歴史的に過渡的な性格を証明しており、その分解とより高度の形態への転化との条件および原因をあきらかにしている。だが、これらの矛盾は、資本主義の可能性をも、それに先行する社会経済制度にくらべての資本主義の進歩性をも、けっして排除するものではない。（第三巻『ロシアにおける資本主義の発展』（＊）第一章　ナロードニキ経済学者の理論的誤り、P33~35）

＊「**第三巻　ロシアにおける資本主義の発展**」は、レーニンの膨大な研究活動の一成果である。レーニンはこの本のための直接の仕事に三年以上を費している。レーニンは、一八九六年一月、「労働者階級解放闘争同盟」事件で逮捕されてまもなく、牢獄のなかで、この著作にとりかかった。1898 年１１月の半ばに最初の二章ができあがった。それはクルプスカヤによって別々のノートに写され、出版社にわたすために近親者に送られた。

コメント

恐慌は「ただ一つの制度――資本主義制度だけの特殊な標識」であり、「生産（資本主義によって社会化された）の社会的性格と取得の私的な、個人的な様式との矛盾」の現れとして必然的に起こるのである。つまり、資本主義的生産関係の基で、資本主義の固有の現象として起こるのであり、資本主義の歴史的に過渡的な性格を証明するものであり、「資本主義の批判」は、資本主義的生産関係ときりはなされた「全般的な福祉とか、『自由に放任された流通』のまちがいとかいう言葉のうえに基礎づけてはならないのであって、生産関係の進化の性格のうえに基礎づけなければならない」のである。

なお、「共産党」の不破さんは、資本主義的生産の「基本的な矛盾」をエンゲルスの誤った認識として否定し、「賃金を上げれば経済は発展する」とシスモンディと瓜二つの主張をしています。